

貨幣の必然性 (I)

—— 宇野理論の一検討 ——

尼 寺 義 弘

目 次

はじめに

- I 貨幣の萌芽形態＝単純な価値形態
 - II 単純な価値形態における等価形態の意義
 - III 価値形態論＝交換過程論 (以上本号)
 - IV A 単純な価値形態 より B 全体的な価値形態 への移行 (以下次号)
 - V B 全体的な価値形態 より C 一般的価値形態 への移行
 - VI D 貨幣形態
 - VII 価値形態論の方法
- むすび

はじめに

貨幣の生成について最も通例的に主張される説は、商品交換の拡大による直接的な交換の「不便」や「困難」から貨幣をみちびきだす理論がそれである。その理論は簡単に述べるとつぎのようなものである。

たとえば、リンネル所有者と上着所有者がいて、リンネル所有者は上着1着に対してリンネル20エルレを交換することを希望し、上着所有者はリンネル20エルレに対して上着1着を交換することを希望する。こうしたばあいにはのみリンネルと上着との直接的な交換取引は成立する。つまり直接的な交換取引は相手の商品に対する互いの欲望の一致が不可欠である。

ところで、リンネル所有者が極力、上着1着を交換に求めたとしても、上着所有者はリンネルでなくて茶を希望しているかもしれないし、また時計をえたいと思っているかもしれない。彼がリンネルと交換したいと思うばあいは偶然的な一致といえよう。しかも上着1着とリンネル20エルレという量的な比率を彼が同様に妥当なものとするかどうかもたぶん偶然的な事情によるといえる。このように、それぞれの商品所有者が勝手に考え行動するのであるから、商品の交換が拡大されるにつれ直接的な交換がおこなわれる可能性はきわめて少ないものとなるであろう。それゆえ商品の交換は重大な不便をきたし、困難におちいらざるをえず、交換の拡大は阻害されることとなる。

ところが、運よくこの不便や困難を乗り越える方法がある。それは商品交換の拡大にともなって多数の人々が自分の商品と引き換えに入手することを希望する商品——「たいていの人がそれと彼らの勤労の生産物とを交換するのを拒まない」¹⁾と考えられる商品、ヨリ「大きな市場性」²⁾を有する商品の登場である。そしてこの商品を手交換手段として使用することによって、交換の不便や困難を克服するのである。いまこの商品を仮にGとしよう。上着との直接的な交換のできないリンネル所有者は、たとえ直接に商品Gを必要としなくても、ひとまず彼のリンネルを商品Gと交換し、その商品Gでたやすく彼の希望する上着と交換することができる。なぜなら商品Gは多数の人々から交換に入手することを希望されている商品であり、したがって商品Gは他の諸商品と容易に交換できるからである。かくて交換の不便や困難は解決され、商品交換は拡大してゆくことになる。そしてこの商品Gの役割を交換の範囲にしたがって、歴史上種々なる商品、たとえば「奴隷、家畜、金属」³⁾などが荷ない「商業や交換の共通の用具」⁴⁾となる。そして貴金属のうち、最終的に唯一の商品金がGの地位を独占するのである。このように多数の人々から入手を望まれる商品Gが貨幣である。だから貨幣の第一義的な役割は交換の不便や困難をとり除く便宜の手

貨幣の必然性（I）

3

段・交換手段ということになる。こうした貨幣の理解は理論の精緻の差はあれ、アダム・スミス以来、伝統的なものである。

以上のような貨幣の生成の理論にたいして、マルクスは根本的な批判を加え、全く新しい貨幣の理論をなしたものである。貨幣は商品交換の拡大にともなうところの不便や困難から生ずる、とすること自体はけっして誤りではない。しかしマルクスはこの段階にとどまらずさらに分析をすすめる。何故に商品交換が拡大してくると交換の困難が生ずるのか？それは商品そのものに即自的に困難（矛盾）が含まれているからではないのか？すると一体、商品とは何か？それは単なる欲望の対象ではない。商品は私的所有と社会的分業にもとづく社会の生産物の一般的な形態である。そこでは私的労働が直接的に社会的労働とはなりえない。ここに根本問題がある。だから商品社会においては具体性を捨象された抽象的人間労働が生産者相互の社会関係の紐帯である。その人間労働の結晶が価値であり、商品の社会的性格を表わしている。それを商品生産者は商品の交換関係において生産物の価値性格として意識する。商品はかくして欲望の対象としての使用価値と他商品との交換可能性である価値との直接的な統一物である。つまり自然的実体と社会的実体という対立する性格を同一物にもっているのである。だから一個の矛盾物である。したがって現実に交換されることになるとその矛盾は発現せざるをえない。この矛盾の発現を媒介する物が貨幣である。したがって、貨幣は商品生産という特殊歴史的な生産関係のもとでのみ発生しうるし、発生せざるをえないものである。それは、たんに交換の不便や困難から生ずるものではなくて、商品そのものに含まれている矛盾から生み出されるのである。このように、マルクスは商品交換の困難は何故に生ずるのか？その根拠はどこに存在するのか？という根本的な視点より分析する。そしてその困難は何によって解決されねばならないのかをみるのである。さらにマルクスは貨幣物神にとらわれた見解を批判する。

4

阪南論集 第9巻第6号

金はあらゆる人々が交換に欲求するから貨幣となる——こう言われるばあい貨幣がすでに前提され、貨幣の一つの性質を述べているのであり同語反復であろう。なぜあらゆる商品と交換しうるという性格が生み出されるのか、それを述べなければならない。——のではなくて、商品の価値という社会的性格を一身に具現しているから、つまり社会的生産関係を自分の体で直接的に表示しているから、あらゆる商品の価値の表現手段となり、したがってまたあらゆる商品と直接的に交換可能なのである。ところが現実には、きらきら輝く金があらゆる人々の交換欲望の対象であるから貨幣となるようにみえる。マルクスは金がその自然的諸属性——その光り輝く色、その比重、その空気中での不酸化性、等々——とともに、あらゆるものと交換しうるという「社会的な自然属性」⁵⁾をなぜもっているのか、を追求する。そして、なぜ金が一般的等価物であり、貨幣であるのか。課題はこの「虚偽の仮象の確立」⁶⁾を究明すること、そしてあらゆる人々から入手を希望される一商品が、なぜ同じ商品仲間のうちから排除され、貨幣として生成しうるのはかを追跡することにある。すなわち「困難は、貨幣が商品であることを理解することにあるのではなく、如何にして、何故に、何によって、商品が貨幣であるかを理解することにあるのである。」⁷⁾この困難を追求し、解決を与えたのが『資本論』第1章の価値形態論、物神性論、第2章の交換過程論である。価値形態論は商品の価値という一つの社会的関係が「如何にして」自然形態である他商品の使用価値で表現されるのか、を論じたものである。それは貨幣の理論的な定在の必然性を証明している。物神性論は労働生産物が商品として現れるや生ずるところの感性的で超感性的な性格、つまり商品の神秘的性格が「何故に」生みだされるのか、その基礎は何か、をみたものである。交換過程論は貨幣の現実的な定在の必然性、つまり商品に包みこまれている使用価値と価値との矛盾の交換過程における発現と、その現実的な解決としての貨幣の生成をみたものである。したがって、貨幣の困難を解決するための以上の三つのうち、

貨幣の必然性 (I)

5

いずれが欠けても貨幣の理論的な把握は不十分なものとならざるをえないのである。

さて、われわれは以下において、上に述べた三つの側面から貨幣を理解しようとはしないで、たんにいわゆる価値形態論だけで貨幣は理解しうるし、しなければならないとする宇野弘蔵氏を中心とする人々の理論を検討する。宇野氏の独自の価値形態の主張にたいしては、すでに久留間鯨造氏⁸⁾ や見田石介氏⁹⁾ による的確な根本的批判がある。われわれはこうした先達の勝れた成果を参考にしながら、宇野氏等が主張してやまない価値形態の移行の問題、「貨幣形態の生成」の問題を取りあげることにする。本稿では宇野氏の主張に組みする人々の見解を積極的に取りあげ、できる限り内在的に分析をすすめる。そしてその考察の結果、こうした人々の貨幣についての理解が『資本論』の概念規定を用いながら、結局、周知の交換の外部的諸困難から貨幣を導き出しているものであることを明らかにするものである。

本稿における記号…は私の強調である。

- 1) Adam Smith, *An inquiry into the nature and causes of The Wealth Of Nations*, Edited by Edwin Cannan, The Modern Library, New York 1937, p. 23.
- 2) Carl Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 2. Auflage, Scientia Verlag, Aalen 1968, S. 249.
- 3) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, Berlin 1953, S. 47.
- 4) A. Smith, *loc. cit.*
- 5) K. Marx, *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie*, Bd. I., Verlag von Otto Meissner, Hamburg 1867, (1. Auflage), S. 775.
- 6) *ebenda*, S. 54.
- 7) *ebenda*, SS. 53 f.
- 8) 久留間鯨造『価値形態論と交換過程論』岩波書店。昭和32年。
- 9) 見田石介『資本論の方法』弘文堂。昭和38年。同『宇野理論とマルクス主義経済学』青木書店。1968年。

6

阪南論集 第9巻第6号

I 貨幣の萌芽形態＝単純な価値形態

宇野氏等はいわゆる氏等の「価値形態」だけで貨幣の必然性は論証しうるとして理論を展開する。それでまずわれわれは氏等も認められる貨幣の「謎的性格」¹⁾ を解くカギである単純な価値形態をみることからはじめよう。氏等によると、単純な価値形態は商品の価値が他の一商品の使用価値にたいする商品所有者の「交換欲望として表現される」²⁾ ものである。宇野氏は言われる。

「もともと一商品の価値が他の商品の使用価値で表現されるということは、単に使用価値を異にする他の商品によって価値が表現されるというのではなく、一商品の所有者が、己れの欲する商品の一定量に対してならば、これこれの量の、その商品を引渡してもよいという意味表示をなすものであって、等価形態にある商品は、その使用価値によって需要せられているのである。」³⁾

このように「意思表示をなす」ことを価値表現とすることは、価値表現がそもそも主観的であることを意味する。

「亜麻布の価値は、その所有者によって、その所有者の需要する一着の上衣に対して、交換に提供されるものとして表示され、その供給をなすわけである。それは飽くまでも亜麻布を商品として所有する者の主観的な評価として行われる価値表現である。」⁴⁾

交換のための「意思表示」を「主観的な評価」にしたがって行うということは、価値表現が結局のところ相手の商品の使用価値に対する商品所有者の「交換欲望」の強さの程度によってきまることとなる。そのことは氏が「等価形態にある商品は、その使用価値によって需要せられている」と言われていることから明らかである。つまり等価形態の商品は、その「使用価値が直接的に欲望の対象とせられる」⁵⁾ にすぎない。だから、価値形

貨幣の必然性 (I)

7

態における等価値形態の商品の独自の役割すなわち「使用価値あるいは商品体がここでは一つの新しい役割を演ずる。それは商品価値の、したがって自分自身の反対物の現象形態となる。」⁶⁾ここに貨幣の萌芽があることが完全に没却されているのである。このような価値表現の理解は氏の学徒に忠実に受けつがれることとなる。たとえば、小林弥六氏は言われる。

「商品の所有者は自分の欲する一定量の他人の商品を獲得するために、これと交換にみずからの商品の一定量を提供してもよいと考えたばあいには交換のための意志表示をおこなう。それは商品所有者の主観的で一方的な意志表示である。」⁷⁾

「交換のための意志表示をすることは、商品の価値を外的に表現することであり、価値表現であり、価値形態である。」⁸⁾

降旗節雄氏も言われる。

「価値形態論において、相対的価値形態にたつ商品が、他の商品の使用価値の一定量で、自己の価値を表現するというのは、具体的には前者の所有者が、後者を、自分の所有している商品との交換を条件として要求しているという関係以外の何ものでもない。」⁹⁾

永谷清氏も言われる。

「亜麻布 20ヤール＝上衣 1 着とは、亜麻布の価値だけが表現されているのだった。いいかえると亜麻布所有者による、自分の 20ヤールと交換に上衣 1 着が欲しいという意志表明にすぎない。」¹⁰⁾

「商品の価値表現とは、自己商品との交換に他商品を欲する関係であった。……亜麻布商品所有者の一方的な交換希望の表明なのである。」¹¹⁾

鈴木鴻一郎氏も言われる。

「ここから(等価値形態に立つ商品が『観念的』であるから——引用者)また『簡単な価値形態』は相対的価値形態に立つ商品所有者の一方的な主観的意図をあらわすものにすぎないのではないかという解釈がでてくる。たとえば『20エルレのリンネル＝1 枚の上衣』という設例についていえば、

8

阪南論集 第9巻第6号

それは1枚の上衣にたいし20エルレのリンネルを提供したいというリンネル所有者の一方的な欲望を表現するものにすぎないというわけである。このように相対的価値形態に立つ商品所有者の一方的な欲望をまっぴらに始めて価値表現が可能となるのではないかと考えられるのである。」¹²⁾

中野正氏も言われる。

「商品所有者は自分の商品の価値を、その欲する他の商品の使用価値の量によって表現せざるをえないのであるが、そのためには、自分の商品も他の商品所有者にとっての使用価値としてあらわれねばならない。」¹³⁾

以上のように各論者は宇野氏の主張を踏襲して価値表現における欲望の意義を強調されるのである。同様の見地にたつものとしてほかに日高普氏¹⁴⁾と渡辺寛氏¹⁵⁾がある。とくに日高氏は「リンネルの茶にたいする一方的関係」¹⁶⁾を示すため価値等式の等号＝を矢印→にしている。このように氏等の価値表現は、商品所有者の欲している他商品の使用価値に対する彼の主観的で一方的な交換希望の意志表明である。

ところで氏等のように価値表現を交換欲望の表現とすると氏等の価値表現そのものを成り立たせている「価値」は主観的で一方的な「商品所有者の交換欲望」となり、価値概念の否定につながることになりわしないか。つまり他商品の使用価値に対する個人的な交換欲望の強さに応じて価値の基準が決まることになり、商品が客観的にもっている価値という社会的な性格が否定されることにならないであろうか。

商品の価値はマルクスの述べているように商品生産に独自の社会的関係を表示するものであり、「商品の経済的質である。」¹⁷⁾それがわれわれの目にみえる姿をとるのは、商品の交換関係において現れる価値形態である。価値は社会的実体としての抽象的人間労働が商品に客観的に対象化されているからこそ、商品の交換関係における社会性、つまり交換可能性、交換能力をもつことができるのである。それは全く社会的な関係から生れたものであり、個人的な関係である欲望や主観などから生れたものではけっし

貨幣の必然性 (I)

9

てない。したがって、マルクスは価値形態論を商品所有者の欲望や主観とは無縁の、商品の価値という社会的性格がいかにして現れるのか、という価値の現象形態に即して分析しているのである。宇野氏等はこのような価値の把握を否定され、それをたんに「商品の所有者が互にその商品を交換しようという、その意味の同質性」¹⁸⁾あるいは「質的一様性(諸商品が一様な価格をもつこと——引用者)」¹⁹⁾と規定される。だから、「形態的には、たとえば金何円であるというのが同質性だということと同じことで、それ(価値——引用者)が何であるかはいえない。」²⁰⁾とするのも当然のことである。したがって価値を交換欲望としての同質性と規定して「価値概念の欠如」²¹⁾を補われ、価値表現を交換欲望の表現とされるのである。

交換欲望の表現は「上衣一着がほしい」²²⁾という関係、他商品の使用価値に対して「価値」を認める商品所有者の主観性の表現である。たしかに商品の交換は相手方の商品にヨリ大きな「重要さ」を「利得獲得の欲望」²³⁾として認めるからおこなわれるのである。だがそれは交換の動機に関するものであって、客観的に商品に対象化された労働の結晶である価値の表現ではありえない。価値表現は上着に「値する」という関係、異なる商品との同等性の関係、商品と商品との社会的関係の表現である。そして対象となる相手の商品上衣は、欲望の表現においては、使用価値として個人的に欲せられるのに対して、価値表現においては他商品と等しいもの、等価物であり、直接的な交換可能性の形態にある。このように両者は明確に区別して論じられねばならない。さらに検討をすすめよう。

- 1) 宇野弘蔵『経済学方法論』東京大学出版会。1962年。199頁。
- 2) 宇野編「現代経済学演習講座新訂『経済原論』」青林書院新社。昭和42年。36頁。以下、『講座原論』と略記する。
- 3) 宇野『経済学方法論』193頁。
- 4) 同書192頁。
- 5) 同書199頁。
- 6) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 20.

10

阪南論集 第9巻第6号

- 7) 小林弥六『流通形態論の研究』青木書店。1969年。99頁。
- 8) 同書100頁。
- 9) 降旗節雄 宇野編『資本論研究』I 筑摩書房。1967年。127頁。
- 10) 永谷 清『資本主義の基礎形態』——『資本論』第一巻の研究(1)—— 御茶の水書房。1970年。79頁。
- 11) 同書97頁。
- 12) 鈴木鴻一郎『価値論論争』青木書店。1959年。203頁。
- 13) 中野 正『価値形態論』日本評論新社。昭和33年。45頁。
- 14) 日高 普『経済原論』時潮社。昭和39年。15—24頁。
- 15) 渡辺 寛『価値と価値形態』鈴木鴻一郎編 宇野弘蔵先生古稀記念『マルクス経済学の研究』上 所収。東京大学出版会。1968年。同書32頁。
- 16) 日高 前掲書 16頁。
- 17) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*. (Rohentwurf) 1857–1858, Anhang 1850–1859, Dietz Verlag, Berlin 1953, S. 59.
- 18) 宇野「経済学ゼミナール(2)『価値論の問題点』」法政大学出版局。1963年。50頁。
- 19) 宇野 宇野編『資本論研究』I 238頁。
- 20) 同書280頁。
- 21) K. Marx, *Das Kapital*. Buch I, Marx-Engels Werke, Bd. 23., Dietz Verlag, Berlin 1962, S. 74.
- 22) 永谷 前掲書98頁。
- 23) 野口建彦「『資本形態』の導出及び展開方法」——『資本論』の方法の再検討を通して——『経済集志』第42巻第4号。所収。1973年。同書75頁。

II 単純な価値形態における等価形態の意義

以上のように価値表現＝交換欲望の表現とすることは等価形態の商品の独自の役割を見逃がすことになる。なぜなら等価形態の商品は欲望の対象として「使用価値によって需要せられている」から、使用価値そのものが演ずる「一つの新しい役割」は全く看過されてしまうからである。つまり等価形態の商品の使用価値を欲望の対象である生のままの使用価値そのものとしてしか理解できないのである。ところが、その使用価値は自分の正

貨幣の必然性 (I)

11

反対物である価値の存在形態・価値物である。それは欲望の対象でなく価値という社会的性格の化身となっているのである。だからこそ等価形態の商品は他商品の価値の表現手段となりえ、その他商品に対して直接的に交換可能な形態なのである。ここに貨幣の萌芽形態がある。これをマルクスは価値表現の「廻り道」の論理の発見によって証明している。マルクスは述べている。

「商品は、本来、二面的なもの、すなわち 使用価値 および 価値、 有用の労働の生産物および抽象的な労働凝固物、である。それゆえ商品は、それがあるところのものとして自らを表示するためには、その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は、商品が生れながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は、商品が他の商品との交際においてはじめこれを獲得する。だが商品の価値形態は、それ自身やはり対象的な形態でなければならない。商品の唯一の対象的な形態は、その使用上の姿・その自然形態である。ところが、ある商品たとえば、リンネルの自然形態はその価値形態の反対物であるから、リンネルはある他の自然形態を、ある他の商品の自然形態を、その価値形態としなければならない。それは、直接に自分自身に対してなしえないことを、直接に他の商品に対して、かくして廻り道をすることによって自分自身に対してなすことができる。その商品は自分の価値をそれ自身の体で、すなわちそれ自身の使用価値で、表現することはできない。しかしそれは、直接的な価値の定在としてのある他の使用価値あるいは商品体に関係することはできる。その商品はそれ自身のうちに含まれている具体的な労働に対して、抽象的人間労働の単なる実現形態としてふるまうことはできないが、他の商品種類に含まれている具体的労働に対してはそうすることができる。そうするためにはその商品はただ、他の商品を自分に対して等価物として等置するだけでよい。一商品の使用価値は、一般にこのような仕方である他の商品の価値の現象形態として役立つがぎりで、その他の商品のためにのみ存在する。」¹⁾

12

阪南論集 第9巻第6号

このように社会的なものである商品の価値は自分自身の身体で表現できないから、他商品の自然形態を等価物たらしめたうえで、その他商品で表現することができる。その場合、等価形態の商品の使用価値・自然形態が価値形態・価値の定在であり、したがって社会的形態・直接的に交換可能な形態である。つまり等価形態の商品は欲望の対象であるから直接的に交換可能な形態にあるのではない。それが価値の存在形態であるからそうなのである。ここに貨幣の秘密がある。つぎに宇野氏等が等価形態の意義をどのようにみているかをみることにしよう。宇野氏は言われる。

「亜麻布商品の所有者にとっては、その 20 エレの価値を表示するというのが問題なのではない。上衣 1 着に対してならば幾エレの亜麻布を提供したらよいかの問題なのである。そういう形で亜麻布の価値は表示されるのであって、上衣が価値物としてあるのも、亜麻布商品の所有者の欲望の対象として等価物とせられたからにほかならない。」²⁾

「リンネルの価値表現において、リンネル所有者は上衣との交換を欲しながら、上衣との交換を保証されていないのにたいして、等価形態にたつ上衣は、リンネル所有者から交換を求められているのであるから、その 1 着をもってただちに——上衣の所有者としては欲してもいない——リンネル 20 ヤールと交換しうる地位にある。いいかえれば、等価形態にたつ商品はつねに直接的交換可能性の形態にあるのである。これは上衣の使用価値体がそのままリンネルの価値の現象形態になっていることに由来する。」³⁾

小林弥六氏は言われる。

「1 枚の上衣はリンネル所有者によっては使用価値として人手をのぞまれ、リンネル 20 ヤールの交換の目標になることによって、その使用価値がリンネル 20 ヤールの価値を表現するものとなるのである。……上衣は使用価値のままでリンネルにたいする直接的交換可能性をもつことになり、上衣は自らがリンネルの価値としてあらわれ、かつ自然形態がそのまま価値としての性質をもちうることを萌芽的にしめしている。」⁴⁾

貨幣の必然性 (I)

13

永谷清氏もつぎのように言われる。

上衣は「亜麻布所有者によって上衣の使用価値が認められたから、つまり使用価値として定立されることによって、亜麻布に対して直接的交換可能性をもちうるのである。」⁵⁾

このように、氏等によると、上着はリンネル商品所有者の欲望の対象となることによって等価物となり、直接的交換可能性の形態にあるかのようである。つまり交換に望まれている1着の上着は、いつでも20エルのリンネルと交換できるから上の規定をもつということを言いたいのであろう。だが、交換に欲せられている商品が「等価物」となり、「直接的交換可能性の形態」となるのは、交換欲望の対象であるからなのであろうか。けっしてそうではない。等価形態の商品体が価値の結晶として、つまり1着の上着の体そのものが、同質な抽象的人間労働の体化物であるからこそそうなのである。もしも等価形態の商品が価値物でなければその商品は価値の表現手段・価値鏡の役割を果さない。したがって、相対的価値形態の商品の価値が表現されないこととなる。このように単純な価値形態の等価形態の商品の使用価値が直接的な「欲望の対象」としてのそれではなく、その正反対物・価値物であることを認めることこそ「貨幣の謎を解くことになるのである。」⁶⁾ だから等価形態の商品は欲望の対象としての使用価値の意味を失っているのである。注

注

もしも交換欲望の対象であるから、価値物であり、等価物であるというのであれば、交換欲望の対象はすべて直接的に交換可能な形態にあるわけである。そうすると子供が互いに自分のもっているベイゴマとメンコを取りかえる関係においてもそうならないであろうか。これは商品と商品との関係においてのみ存在する価値関係とは無縁のものを価値表現に含ませる余地を残しているといえる。この点については、久留間綾造『価値形態論と交換過程論』66-67頁。宇野『価値論の研究』東京大学出版会。1965年。168-169頁。参照。

ところで氏等が欲望の対象としてしか使用価値をみることができないの

14

阪南論集 第9巻第6号

は、氏等がくりかえし主張される例の「1/2着の上着」というマルクスの表現に対する批判に集中的にあらわれている。すなわち、「1/2着の上着」などというのは消費手段たりえず、使用価値でありえないから等価形態の商品になりえないというのである。だが「1/2着の上着」こそ、氏等のいう商品所有者の欲望という誤解を入れうる余地の全くないことを明確に示した重要な指摘である。まず氏等の主張をみることにしよう。

宇野氏はつぎのように言われる。

「マルクスにあっては等価物は、単に、相対的価値形態にある商品に対してその使用価値を異にする価値の担い手として認められるにすぎない。それは一商品の価値を他の商品の使用価値で表示するというものではない。半着の上衣という使用価値のありえないことはいうまでもないであろう。マルクスはここですでに上衣をも貨幣としての金と同様に直接その使用価値が対象とせられるものでないかの如くに考えているのである。」⁷⁾

降旗節雄氏も同様につぎのように言われる。

「『20エルのリンネル=1/2着の上衣』というのは、何としても価値形態とはいえない。価値形態においては等価物は使用価値として意味をもつのであって、1/2着の上衣では、すでに使用価値としての意味を失っているからである。」⁸⁾

永谷清氏もつぎのように言われる。

「『上衣1/2着』は、上衣としての使用価値をもたないから、等価形態に立てないことは自明である」⁹⁾。

大内秀明氏もつぎのように言われる。

宇野「教授が欲望を問題にされた意図は、価値が等価商品の使用価値量で表現される『廻り道』にさいして、使用価値量で表現されるという点の強調にあったものとおもわれる。使用価値が人間の直接・間接の欲望を充足するものである以上、その使用価値量で価値表現がおこなわれるばあい、所有者の欲望が考慮されなければならないのは、いわば自明のことだから

貨幣の必然性 (I)

15

である。とくにマルクスが、価値表現にさいして価値の実体的な量的関係を重視するあまり、価値を『1/2 着』の上衣で表現するというナンセンスな主張におちいったのにたいし、価値表現における使用価値量の契機の意味を強調されたのは、きわめて重要であった。」¹⁰⁾

阪口正雄氏もつぎのように言われる。

「上着1着とリンネル40エレ（または牛1頭とリンネル600エレ）との間には共通の土俵があるが、上着2分の1着（または牛30分の1頭）とリンネル20エレとの間には価値という共通の土俵がないからである。それは、2分の1着（や30分の1頭）が消費手段でない（使用価値をもたない）ということからだけでなく、そもそも生産成果でない（労働であれ何であれ費用をもたない）ということから出てくる。つまり、上着半着や牛30分の1頭はつくれないのである（もちろんこの際、後者は技術的に不能というのだし、前者は技術的に可能でも経済的に不能というのである。前者の場合、結局消費手段でないから生産成果でもないわけだし、後者の場合、そもそも生産成果でないから消費手段でもないわけである。）」¹¹⁾

鈴木鴻一郎氏も言われる。

「『2分の1枚の上衣』とは何であるか。それは他の何かではありえても商品の使用価値でないことだけは確かであろう。そうだとすれば、『リンネルの所有者の個人的・特殊的な欲望の対象』ともなりえないことはこれを改めて指摘するまでもないであろう。」¹²⁾

このように等価形態の商品は使用価値として入手を望まれているのであり、欲望の対象であるから、その商品は等価物であり、直接的交換可能性をもつのである。そして1/2着の上着は欲望の対象とはなりえないし、使用価値でありえないから等価物とはなりえず全くナンセンスである。このように言われる。ここで氏等は「等価物」、「直接的交換可能性の形態」という概念を使われているが『資本論』の原意とは全く異なる意味に用いていることは明らかである。マルクスは商品の使用価値が欲望の対象である

16

阪南論集 第9巻第6号

から上の性質をもつなどということは述べていない。むしろそれとは全く逆に、欲望の対象ではなく、社会的なものである価値の結晶であるからこそまさに使用価値は等価物であり、直接的交換可能性の形態にあることを強調しているのである。だから氏等にとっては等価形態の商品の使用価値が個人的な欲望の対象という意味を失い、使用価値ではなくて価値であること、社会的性格そのものであることが全く忘れられているのである。

価値は商品のいかなる部分においても、またその倍数したものにおいても含まれているのであるから、つまり使用価値は価値のたんなる担い手であり、したがってその使用形態に対して価値は直接的には無縁のものであるから、1/2着の上着という表現は価値表現の手段、価値鏡となりうるのである。もちろん1/2着の上着は使用価値ではありえないし、生産成果でもありえない。そしてまた1/2着の上着が現実交換されることなど考えられもしない。だが、20エレのリンネルは上着いくらに値するのか？それは1/2着の上着に値する。これは欲望の表現ではなく、価値表現である。その場合、1/2着の上着は体を暖めるとか、おしゃれのために用いるとかという使用形態においてはけっしてみられていずに、リンネル20エレの価値の姿として、価値の結晶として観念的に、頭の中でみられているのである。ここにこそ価値表現の観念的性格（主観的という意味ではない）がある。マルクスは『経済学批判』でつぎのような興味深い例をあげている。

「一つの宮殿の交換価値は、一定数の靴墨の罐で表現することができる。ロンドンの靴墨製造業者たちは、その反対に彼らのたくさんの靴墨罐の交換価値をいくつかの宮殿で表現してきた。」¹³⁾

これは、商品の価値がその表現手段である相手方の商品の使用価値のとり姿には無関係であり、またその使用価値が満足させる欲望とも無縁であることを示している。つまり靴墨製造業者は宮殿を交換に欲して自分の靴墨罐の価値を表現するものではないであろう。それは自分の商品の価値を宮殿で評価するためにおこなうのである。だから当然、自分の所有してい

貨幣の必然性 (I)

17

靴墨罐が宮殿いくつに値するか？ 1/2 の宮殿に値する、という表現も想定されうるのである。だから商品所有者は自分の商品の価値を計算するための手段として宮殿や上着を等価形態に考えているのであり、欲望の対象として考えているのではない。だから、1/2 着の上着あるいは 1/2 の宮殿という表現は当然、価値表現である。マルクスは、このような表現によって価値は使用価値とは全く異なるものであり、その担い手である使用価値がいくら分割され、あるいは合成されても無関係であることを示している。氏等はただ欲望の対象としてしか等価形態の商品体をみることができないから、1/2 着の上着は交換できないとか、共通の上俵がないなどというナンセンスにおちいるのである。氏等の誤りはそもそも商品の使用価値と価値を明確に区別して理解しないことにもとづいており、それが価値表現と欲望の表現を同一視することにもなっているのである。価値表現において使用価値が等価物であり、直接的な交換可能性の形態にあるのは、それが欲望の対象であるからではなくて、社会的性格の化身であるからこそそうなのである。氏等は価値表現について述べながら、欲望にもとづくところの使用対象と使用対象との交換、つまり「上衣の所有者がおのれの欲する一着の上衣にたいしてならリンネル 20 ヤールを渡してもよいという関係」¹⁴⁾ を考えられているようである。

ところで「『商品所有者の欲望』を積極的にもち出すことにたいして消極的態度をとりたく思う」¹⁵⁾ 鈴木鴻一郎氏は等価形態に特有な「使用価値がその反対物の、価値の、現象形態となる」¹⁶⁾ こと、*„quid pro quo“* (交替) を「『抽象的人間の労働』に言及することなしに説明」¹⁷⁾ しようとされて「論理的商品」¹⁸⁾ なるものを設定される。その「論理的商品」の「価値は同質性であり、使用価値はこれにたいして異質性をなす」¹⁹⁾ ものである。そして「個々の論理的商品は元来その異質性にたいして同質性としてあるわけであるが、しかしここではまだなお同質性になりきっておらず、これから積極的に同質性に生成すべき関係にもある」²⁰⁾ この「同質性へ向って

18

阪南論集 第9巻第6号

その第一歩を踏み出そうとする」²¹⁾ 論理的商品はなによりもまず、「一個の他の『商品』と『関連』」²²⁾ をもたねばならない。この「関連」が「簡単な価値形態」における価値表現の「別名」²³⁾ である。したがって「同質性へ生成せんとする論理的商品」の「第一歩」は「裏からいえば、一個の『ある他の使用価値あるいは商品体』がこれに『関連』するにいたった当該論理的商品の価値の『現象形態』となったということであり、いいかえれば『等価形態』に立たしめられたこの『商品』にとって、*„quid pro quo“* が生じたということにほかならないといってよいであろう。」²⁴⁾ このように鈴木氏は言われるのである。だが商品の使用価値と価値を異質性と同質性とし、価値表現を個々の論理的商品の他のそれとの同質性へと生成すべき関係とすることは一体、何のことであろうか？そしてまたこれを「裏からいえば」*„quid pro quo“* の説明となるものであろうか？否である。氏の主張に従えば、マルクスが商品を分析し、価値形態を論及した理論的成果は捨て去られ、全くわけのわからぬものとなってしまう。商品は周知のごとく、使用価値と価値という二面的な性格をもつものであり、一方は欲望の対象である自然的性格であり、他方は他の商品と同等であり、交換可能である社会的性格である。そして一方は具体的有用労働の生産物であり、他方は抽象的人間労働の凝固物である。商品社会においては、私的労働は直接的に社会的労働として現われず、その具体性を捨象された抽象的人間労働の形態で、はじめて社会的労働として現れる。そして抽象的人間労働という点で商品所有者と商品所有者の社会的関係がとり結ばれるものである。その人間労働の物的表現が価値である。だからこそ価値は社会的なものなのである。それが人々に意識されるのは商品が価値として互いに交換されるときである。そして商品の使用価値は自然的性格であるから自分自身の体で自分を表現しており他商品所有者の欲望の対象である。商品の価値は社会的性格であり、自分自身の担い手である使用価値で自分を表現することはできない。だから他商品の使用価値を価値の表現手段として、つまり等価物とし

貨幣の必然性 (I)

19

てのその他商品で自分自身の価値性格および価値量を表現するのである。だからこそ等価形態の商品の使用価値の „*quid pro quo*“ は生じるのである。だから価値表現において、価値を欲望の対象である使用価値と混同せず、抽象的・人間労働の対象化されたものであり、その点において他商品と同等であり、交換可能な社会的性格と規定することこそ重要なのである。氏のように価値を社会的性格とせず、たんに「同質性」とし、価値表現を「同質性に生成すべき関係」としたのでは何を述べているのか全くわからない。商品の価値とは何か、ということ进行分析することから経済学ははじまるのであって、「同質性」という言葉を与えただけでは意味のないことである。

さて、以上みてきたように、価値表現を交換欲望の表現とすることは、「貨幣との非同一次性」²⁵⁾を強調することによって、等価形態の独自の性格、貨幣の萌芽であるという性格を見失うものであった。われわれはつぎに、氏等が価値表現と交換欲望の表現とを何故に混同あるいは同一視することになったのかをみることにしよう。

- 1) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 20.
- 2) 宇野『経済学方法論』195-196頁。
- 3) 宇野『講座原論』37頁。
- 4) 小林『流通形態論の研究』100頁。
- 5) 永谷『資本主義の基礎形態』78頁。
- 6) 宇野『経済学方法論』199頁。
- 7) 同書 195頁。および 宇野『経済学の効用』東京大学出版会。1972年。104頁。および 同『資本論の経済学』岩波新書。1969年。108頁。参照。
- 8) 降旗 宇野編『資本論研究』I 21頁。
- 9) 永谷 前掲書 99-100頁。
- 10) 大内秀明『価値論の形成』東京大学出版会。1967年。193頁。
- 11) 阪口正雄「商品価値（関係）における形態規定と分量規定」鈴木編『マルクス経済学の研究』上 東京大学出版会。1968年。所収。同書 48-49頁。
- 12) 鈴木『価値論論争』144頁。なお 同書 171頁。参照。
- 13) K. Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, SS. 22-23.

20

阪南論集 第9巻第6号

- 14) 宇野『講座原論』36頁。
- 15) 鈴木 前掲書 171頁。
- 16) K. Marx, *Das Kapital*, M-E Werke, Bd. 23., S. 70.
- 17) 鈴木 前掲書 162頁。
- 18), 19), 20), 21), 22) 同書 165-166頁。
- 23), 24) 同書 167頁。
- 25) 阪口 鈴木編 前掲書 49頁。

III 価値形態論＝交換過程論

これまでみてきたように、宇野氏等にとって、商品の価値は商品所有者の他商品の使用価値に対する交換欲望として表現されるものである。それは商品所有者の個人的な交換欲望という主観的・一方的な性格が価値表現を規定づけることを意味している。氏等にとって価値表現が個人的なもの、主観的なものと考えられている一つの理由に「価値実体論と交換過程論」とが「価値形態論の展開を阻害」¹⁾しているから、「理論的展開としては不要」²⁾として価値実体論と交換過程論とを理論から放逐していることにある。それをつぎにみることにしよう。

宇野氏は商品の二要因論で価値の実体規定を与えることを拒否し、価値概念を明確にしない。つまり氏は、いわゆる「価値としての同質性」³⁾とは何か、を分析しない。そして実体規定を与えるかわりに、商品所有者の表象に映ずるままの「たがいに交換されるという同質性」⁴⁾と述べることで満足し、それを経済学の理論の展開の出発点とされる。そして氏の「価値としての同質性」は商品所有者の他商品の使用価値に対する「交換欲望として表現される」としている。つまり価値の実体規定にもとづく価値概念を、商品所有者の「交換欲望」にもとづく「たがいに交換されるという同質性」というきわめて主観的で一方的なもので補われているから、価値表現も主観的なものとならざるをえない。したがって同質性関係としての価値関係にもとづく価値表現は当然、否定されている。⁵⁾

貨幣の必然性 (I)

21

さらに氏は、価値形態は商品所有者の欲望を考えれば理解できない、として『資本論』の第2章「交換過程」で登場してくる商品所有者を「価値形態」において中心的に考察するのである。そして「交換過程論」は価値形態論の「展開の背後に含蓄されるもの」⁶⁾であり、それ自体は「不要」とするのである。

このように宇野氏によると交換過程論は価値形態論の展開の背後に含蓄されるものとして、その中に吸収されるものと考えられている。つぎに氏の見解に組みする人々の主張を掲げておこう。

小林弥六氏は言われる。

「価値形態論はほんらい交換過程論をみずからのうちに止揚しつつ、価値と使用価値の統一的関係として展開されねばならないものであろう。」⁷⁾

『『資本論』は価値形態の展開をたんに価値の表現形態の発展としてあつかう傾向がつよく、交換過程論では交換の矛盾を列記するにとどまっているが、この両者を統一して価値表現の展開は商品の交換形態の展開であり、また価値形態の展開であるものと解すべきであらう。」⁸⁾

「いわゆる交換の矛盾も正しくは価値形態をつうじて措定され、またその解決の機構が設定されると考えられる。たとえば交換の矛盾(一)は価値表現における価値と使用価値との外的表示において、交換の矛盾(二)は拡大された価値形態における価値表現の一般性と実現の個別性の問題として、さらに交換の矛盾(三)は、拡大された価値形態より一般的価値形態への移行の部分の問題に対応するものであろう。」⁹⁾

永谷清氏は言われる。

「マルクスにあっては、価値形態論のうちに価値と使用価値との矛盾をとらえることに成功していないために、この矛盾の展開(内的矛盾の外的矛盾への転化)は、商品論と貨幣論の中間に別個に物々交換から貨幣が発生してくる過程のような『第2章交換過程』を必要とするようになっていく、といってよいであらう。われわれのように価値形態を価値と使用価値

22

阪南論集 第9巻第6号

との矛盾の展開過程ととらえる場合に、貨幣の発生を、価値と使用価値の矛盾の必然的結果として把握しうる。つまり物々交換からの貨幣の歴史的発生ではなくて、商品の価値表現における貨幣形態の成立として、商品論内部でとけることになる。価値形態論と交換過程論における貨幣生成をいかに理解すべきか、という『資本論』解釈史の難題も、このように解してはじめて解明できるのではないだろうか。」¹⁰⁾

「価値形態論での所有者および彼の欲望の捨象、交換過程での所有者および欲望の設定、価値尺度論での観念性の指摘、等が統一的に価値形態論の中に吸収されうることになる。」¹¹⁾

日高普氏は交換過程論を必要としないとして言われる。

「交換過程論は、貨幣形態の必然性ではなしに貨幣そのものの必然性を、論理の展開としてよりもむしろ事実即して説明する内容をもっているものであり、その意味で価値形態論を補完する関係にあるようである。けれどもそのようなものが商品から展開する論理の一環として必然的な位置づけをもちうるものかどうかは疑問とされるのであり、また価値形態論としても、そうしたものを補完的に必要とする理由はまったくないものと考えられなければならない。その点、交換過程論を経済原論から省いたのは宇野『原論』の功績である。」¹²⁾

鈴木鴻一郎氏は交換過程論の意義を理解できないとして言われる。

「要するに、『交換過程』論の内容をなす貨幣形成の理論的および歴史的説明は、私のみるところでは、いずれも、価値形態を『交換関係』と同一視するマルクスの疑問の側面の集中的表現にほかならないのではないかと考えられるのであり、従ってこの章の意義がどこにあるのか、私にはいまのところ理解に困難であるというほかはない。」¹³⁾

このように各論者とも価値形態論は交換過程論をみずからのうちに「止揚」し、両者を「統一的」に理解するか、あるいは交換過程論を「不要」とするのである。

貨幣の必然性 (I)

23

さて宇野氏等は実体にもとづく価値概念を拒否し、それを「交換欲望」にもとづく「同質性」で補い、そして理論の展開の後方で主たる役割を演ずる商品所有者の欲望をその前段階で登場させる。そうすることによって価値の実体論と交換過程論を理論から放逐してしまうのである。だから価値表現が商品所有者の交換欲望の表現という主観的で一方的なものとならざるをえないのである。

ところで価値実体論と価値形態論と交換過程論とはそれぞれの理論段階において必然的な位置づけをもち、互いに切り離しえない統一にあるにもかかわらず、価値実体論を切り捨て、交換過程論を不要とする宇野氏等はどのようにして価値形態論だけで貨幣の必然性を論証しようとするのであろうか。宇野氏はそれについてつぎのように言われる。少々長くなるが重要な箇所なのでパラグラフ全部を引用する。

「話が大部分な方にきてしまったが、『交換過程』ではマルクスも商品所有者をしきりにあげています。私の考えでは原理としては、価値形態で等価値商品の使用価値が極めて重要なのでそれで自己の商品の価値を他の商品のその使用価値で表わすということになる。『交換過程』のように交換してしまったのでは、貨幣形態への展開はできなくなる。双方に等量の労働が対象化されているというのでは、貨幣など必要でない。私の理解する限りでは一商品の所有者が他の商品の使用価値でその価値を表わすというのは、直接的交換過程のように、相手の商品所有者がどこにいるか、またはたしてその商品との交換を欲する否か、むしろ一般的には、そういう直接的交換が行われえないということが、貨幣形態を展開することになったのです。それが商品の価値と使用価値の矛盾によるわけです。価値として相手がどう思おうがおかまいなしに交換を求めうるものとしてあり、使用価値としては相手から交換を申込まれる以外にその価値を実現しえないということになるわけですが、それがまさにリンネル20エレ＝1着の上衣というような場合に、上衣の所有者がたまたま20エレのリンネルを求めている

24

阪南論集 第9巻第6号

という特別の事情でもあれば交換されてしまっていて、その矛盾は、貨幣の出現をまたないで解決される。しかし、そんなことは一般的にいえることではない。商品経済は物々交換で終わってしまうわけです。いいかえれば、価値形態では、そういう交換関係そのものを論ずるのでなく、そういう交換関係にも共通な社会的関係としての商品の所有者の商品の価値表現が、個別的に生産された商品の供給と需要とを社会的にするために結局は貨幣形態を出現せしめるものであることを明らかにしようとするものでなければならない。双方の商品に等量の労働が投下されているから交換されるというのではなく、一商品の貨幣による価値表現は、貨幣自身にいわゆる直接交換性を与えるという関係、それと同時にあらゆる商品はもはや等価値形態に立たなくなるんです。それは商品の価値と使用価値の矛盾の現実的解決を齎らすことになるというわけです。」¹⁴⁾

「元来、商品は、直接の交換としては交換されないで、貨幣による流通として交換されるものである。そのことを明らかにするのが、この価値形態論の任務となっている。」¹⁵⁾

引用から明らかなように、宇野氏はいわゆる価値形態論の任務をつぎのようにみるのである。すなわち価値形態論は、商品の使用価値と価値との矛盾が商品の直接的な交換を不可能とし、この不可能となった交換が貨幣を出現せしめ、商品の交換を商品流通として実現させるものであることを証明することにある。そして具体的に言うならば、価値表現は商品所有者の他商品の使用価値に対する交換欲望の表現であるのだから、それは一方的かつ主観的なものである。だから現実に商品が交換されるかどうかは相手の商品所有者の交換する意思に全く依存することになる。ところが商品所有者の交換欲望の対象はそれぞれ異なり千差万別である。だから交換欲望が互いに一致し、希望どおりの交換がおこなわれるのはきわめてまれなことである。したがって交換はゆきづまらざるをえない。そこでこの困難を解決するのに必要な媒介者として、「いずれの商品所有者からも交換を

貨幣の必然性 (1)

25

求められる」¹⁶⁾ 商品，すなわち貨幣が登場する。これを証明すること，つまり直接的な交換の困難から貨幣を導き出すことが価値形態論の課題となるのである。だから貨幣はいわゆる交換の困難の媒介者として，あるいは流通手段として登場するだけであり，貨幣の経済的形態規定性である一般的な等価物の理論的意義が軽視されるのである。なるほど氏は自分の「価値形態論」でマルクスの論究している概念をふんだんに用いられている。だが，上の引用にもみられるように，本質的には直接的な交換の困難から貨幣を導き出すことに価値形態論の意義をみようとするのである。したがって氏の主張を示すとつぎのようになる。

商品の価値と使用価値の矛盾→交換欲望の拡大にもとづく価値形態の展開→商品交換の困難の拡大→交換において共通に望まれる商品の出現→この商品を媒介とする交換の困難の解決→貨幣の成立

このように氏の価値形態論は商品の使用価値と価値との矛盾の展開過程であり，その矛盾が貨幣の成立によって解決される過程である。したがって価値形態論といっても，社会的な関係である商品の価値が「いかにして」他商品の使用価値で表現されるか，という価値形態論の根本的な課題は消えてしまうのである。

価値形態論は使用価値と価値の直接的な統一体である商品のうち，価値に即して分析し，価値がいかなる現象形態をとるかをみたものである。だから，あくまで商品を「分析的」¹⁷⁾ 「一面的」¹⁸⁾ にみているのである。これに対して交換過程論は，商品を全体として，対立物である使用価値と価値との直接的な統一において全面的にみているのである。だから矛盾は展開されねばならない。つまり商品と商品との交換過程において矛盾は発現し，その矛盾を媒介する物として貨幣が現実を生み出されざるをえないことを論証しているのである。

このように価値形態論と交換過程論はそれぞれ考察する対象も方法も異なるものであるにもかかわらず，氏等は同一視しようとされるのである。注

26

阪南論集 第9巻第6号

それが貨幣の必然性の論証においてどのような結果を生ずるかを，氏等のいわゆる「価値形態の展開」においてつぎにみることにしよう。

注

降旗氏は価値形態論と交換過程論との関係について，つぎのように言われる。

「つまり価値形態論のほうも，やはり『使用価値および価値の直接的統一としての商品そのものがふくむ矛盾がどのように展開され，またそれらの矛盾を媒介するものとしていかに貨幣商品が必然的に形成されるか』ということをあきらかにしたもの』¹⁹⁾ と言えるんじゃないか。」¹⁹⁾ このように氏は交換過程論を価値形態論として主張するのである。

1) 2) 宇野 宇野編『資本論研究』I 254 頁。

3) 宇野『講座原論』39 頁。

4) 同書 32 頁。

5) 同等性関係と価値表現の関係については拙稿「価値表現の両極の『逆の連関』について」(下)『阪南論集』第8巻。1973 年。参照。

6) 宇野「経済学と哲学」『思想』1970 年。第三号。所収。同書 80 頁。

7) 小林『流通形態論の研究』106 頁。

8) 同書 112 頁。

9) 同書 100 頁。

10) 永谷『資本主義の基礎形態』145 頁。

11) 同書 83 頁。

12) 日高『経済原論』24 頁。

13) 鈴木『マルクス経済学』昭和 42 年。弘文堂新社。63 頁。

14) 宇野「経済学と哲学」前掲『思想』所収。同書 80-81 頁。

15) 宇野『講座原論』43-44 頁。

16) 同書 45 頁。

17) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 44.

18) ditto, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, S. 37.

19) 降旗 宇野編『資本論研究』I 250 頁。

1974 年 3 月 30 日 (未完)